

2022年4月

課題本 『コンビニ人間』

村田紗耶香/著 文藝春秋 2016年

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

人の生き方とは、なんとなやましいものか。

芥川賞の受賞作品は、一筋縄ではいかないことが多いとは思いますが。

主人公の「私」は、古倉恵子 36 歳。コンビニエンスストア(コンビニ)で、アルバイトではありますが18年間「店員」をしてきました。東京近郊の住宅地にある普通の家に生まれ、普通に愛されて育ったというのですが、少し奇妙がられる子供だったと語られます。幼稚園や小学校でのエピソードが書かれていますが、当事者間では理解しにくかったことでしょう。暴力行為と片付けられかもしれません。成長するとだんだんトラブルは起こさなくなったようですが、〈どうすればそういう奇妙なところが『治る』のか〉と心配されていた子供でした。

『治る』という言葉に二重括弧をつけてあるところで、以前(2013年4月例会)読んだ『こちらあみ子』(今村夏子 筑摩書房)を思い出しました。「あみ子さん」に重なります。「あみ子さん」は、双方向の関わりを求めはするものの、基本的には「相手」の存在を必要とせず、自分が生み出す薄い膜の内側で自分らしさをさらけ出して生きています。

一方、この主人公の「私」は、外側から薄い膜をはってもらって、それによって自分を形作ります。「私」は、〈私の摂取する世界は、自分を形成するものが変化すると変わる〉と自認している人物です。

自前の膜を張っているような「あみ子さん」と、コンビニ店員という膜を外から張ってもらっている「私」。つまり、「あみ子さん」と「私」は、自分の世界を作る方法が全く逆なのですが、家族や親しい人から見るとどちらも「奇妙な存在」になってしまいます。自分たちは普通だ、と思い込んでいる周囲の人たちは、なんとかして自分たちの期待通りに「治る」ようにと願っています。この2冊を並べると「普通」「治る」が強調されて、心騒ぐ言葉として脳裏に残りました。

この「私」が、18年前、〈奇妙なこども〉を終了して、「店員」という〈世界の正常な部品として生まれる〉ことになりました。〈どうすれば普通の人間になれるのか〉わからなかった「私」が世界の歯車になれたのです。

コンビニの「店員」というのは、制服で生物としての性別を消し去り、男女を区別しない仕事であり、機械仕掛けのように動く世界の歯車になって、マニュアル通りに振る舞うのです。無遅刻無欠勤の良い部品として、朝の出勤から夜の交代まで、「私」は18年間問題も起こさず「店員」をこなしてきました。

この小説の前半はコンビニでの「私」の状況記述で、その中で店長や数名の同僚にも紹介してもらい、軽く読み進みました。コンビニの仕事内容も働くシステムも珍しく、社会的なマーケット論へも進みたくくなります。この作者は、作品背景が奇抜なので驚かされるのですが、今回のコンビニは、小説としての道具に過ぎません。

歯車の一つとして形作られることは、「私」にとっては生き易い形ですから、アルバイトであろうと、結婚しない身であろうと、いっこうに気にもならず、それなりに仕事に習熟して小さな達成感も味わい、「普通に」暮らして居るつもりで居ました。

ところが、新入り店員の白羽さんが登場してから、「私」も、読んでいる私も、気分がややこしくなりました。「私」より、私が居心地悪くなってきました。

白羽さんは、だらしない。「店員」としての仕事が通用しなくなってクビになりますが、家賃滞納で「私」のところへ居候です。しかも、就職せず自分で稼ぐ気が無くて、「女と言うだけで寄生虫になることがゆるされているから奴らに復讐する」と言い出すのです。「私」も、世間の風よけに都合が良いから、白羽さんを「飼い」、「餌」を与えている気です。お互いは、傷つかない部分が似ているのかもしれませんが。

〈外に出たら強姦される。もっとはたらけとムラの奴隷だ。僕は一生、死ぬまで、誰にも干渉されずにただ息をしたい。僕は、だれにも迷惑をかけていないのに平然と僕の人生に干渉してくる。普通の人間っていうのは普通じゃない人間を裁判するのが趣味なんですよ〉白羽さんにこう言われると、自分勝手な言い分だと突っこみたいのは別として、まんざら違うとも言えない部分もあるのです。

縄文時代に興味を持っているような白羽さんは、ムラの論理で「同調圧力」を告発します。社会の閉鎖性や、同質性への傾斜、異論排除、集団の結束を維持することなどを大上段に振りかざす「同調圧力」ですが、白羽さんならずとも「普通」という言葉にもそのような意味合いを感じます。

〈普通の人間という皮を被ってマニュアル通りに振る舞い、「普通の人間」という架空の生き物を演じる〉。「コンビニ人間」という題の意味の一つには、これが当てはまるでしょう。しかしこれは、社会時評としても通用しますが、それで切り上げないのが文学(芥川賞)の働き場所だと思います。

「コンビニ人間という動物」としての「私」がうごめくのは、もう、社会現象ではなく、生きた人間のあり方です。

〈普通の人間というものの定型は、縄文時代以来変わらずずっとあったのだ〉
〈ムラにとっての役立たずは、生きている事を糾弾される世界。社会にとって何の価値も無ければムラから排除される〉手当たり次第、目に入ったものを言葉で殴っているだけに見える、と「私」からでさえ思える飛躍だらけの白羽理論ですが、まんざら捨ててしまうものでもない目の付け所を感じます。

穏便に済ませるためには、個性の衣は制服に隠して、マニュアルに従うのが無難。しかし、「私」はコンビニ人間でいることこそが「私」なのです。

「店員」の制服は、「私」を意味のある生き物にしてくれます。「私」は、「店員」であることを望んでいるし、お客が私を「店員」にしてくれます。何の為に眠るのか、何を基準にして動くのか、合理的か否か、それを決めてくれる「店員」です。たとえ、のたれ死んでもいいという覚悟をした人格は、演じている「店員」まるまが、演じているのでは無い生き方に見えます。

「あみ子さん」も「私」も、「普通であれ」と望まれることが苦痛なのですが、生きにくいだろうと思われている彼女たちより、自分たちが「普通」であると考えている周りの人達の方がよほど生きにくいのではないかと思いが動きます。

外から見える「コンビニ人間」から、「うごめくコンビニ人間という動物」に視線を変えさせ、「普通人」に居心地の悪さを贈りたいのが、作家の野心かと感じています。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【 N2 】

本を読むときに以前読んだ本と対比させて読むと理解が深まるという言葉に、はっとさせられました。

◆【 SM 】

冒頭に〈…私は普通の家に生まれ、普通に愛されて育った〉とある。著者村田紗耶香から読者への挑戦ではないかと感じ読み始める。主人公に共感し『治る』に違和感を抱きながら読み進めると、結婚した主人公の様子を見に来た妹が爆発的な言葉で襲う。私の頭も爆発する。妹の考えにほんの少しだが共感する私が居たからだ。ショックだった。変わっていることを自認する私だが、私の中の私よ、あなたの“普通”は大丈夫か？考えることを足踏みしていないか？村田紗耶香の挑発的な小説に魅せられ、『殺人出産』『生命式』を読了。

『コンビニ人間』を読んで

◆【 TK 】

長年本を読んでいて戦争とか日本の昔の時代についての本が多いので現代社会のことを扱った小説を読みたいとちょうど思っていたところこの本に出会いました。

無機質、事務的、機械的な文体。味気無いのですが最初の数ページを読んですぐ現代にみられる発達障害の人が登場してきました。

インターネットをみるとやはり私と同じ事を感じている人が多数ありました。

主人公は規定されたことを忠実にこなしていける仕事のできる人。機械的に事務的にテキパキできるのですが、わたしの知っている範囲での同じタイプのかたは仕事ができるだけでなく、それが少しでもはずれた反応をした人を理解できないばかりか、激しく怒ってしまい人とコミュニケーションができず職場におられなくなるのでした。

人の言動の背景にどんな動機があるのか洞察力とか想像できないのです。人をも制しようとするのは僭越でけんかをうってるのかともとられる。

それにしてもいろんな他の発達障害を調べてみると、そういえば私もそんな所もあるともとれる。普通とは普通でないとは？と考えさせられる。

現代は正社員が一部の会社がほとんどでフリーターでお店がまわっている。そして、結婚もしない人も多くなっている。収入が少なく結婚も難しいという人もいる。さらに何かの目標のためにそれが本業になってアルバイトが二の次のなっている人も多い。芸人を目指している人もそうだ。

同じ事の繰返しの方が仕事をしやすく仕事を終わって他のことにも没頭できるのがコンビニのような仕事の利点もある。

忙しく情報の多い時代にやりたいことを没頭しすぎると人とかかわりが少なくなってきたいくのかとも思う。しかしこの主人公はここまでタイプではなく無機質な心理と結婚に焦点を当てている。

普通とは？どんな人なのか考えさせられる本だ。

そして、やはり人の言動の動機に愛とか気遣いがないと味気ない人生になってしまうとひしひしと感じる。

当たり前だけどなかなかできないけどそれができるようになりたい。

◆【T】

主人公の古倉さんは、普通がわからない。普通の人の考え、普通の人の行動・・・人と同じように考えられない、行動できないというのは、さぞかし生きづらいだろうと思う。

しかし、【普通】というのは多数派(マジョリティー)ということで大多数の人が属している集団が【普通】というカテゴリーに分類されているに過ぎない。それは、正しいとか間違っているとか、真理とか正義とかを意味しているものではない。

【普通】の範囲は、人により、環境により、歴史により、年齢により、国により変わるものであり、時には、各自の属しているグループによっても変化するものである。また、【普通】の中で生活している人が、みな同じ考えや行動をするかということ、そうでもない。【普通】であることが生きやすいと考え、自分の考えが少し違っても、【普通】と考えられている事象に寄せたりすることもある。

なぜ、多く的人是【普通】を選ぶのか？それは、似ていることや同じ考え・行動に安心感を持つし、生きることが楽だということが考えられる。また、集団の中で同調圧力がかかり、多くの人を【普通】という枠に押し込み、枠からはみ出すことを許さなくなりがちである。そのために、異分子・マイノリティの人々を排除していくようになるのではないか。

古倉さんは自分の居場所を見つけた。その中で、生き生きと生きることができるようになった。

【普通】の枠にはまらなくていいから自分の生き方をこれからもしてほしいなと思った。

◆【N2】

「〇〇さんの時代は良かったんですよ。私なんて生まれてからずーっと不況なんですよ」

二十年ほど前に子育て世代の女性にこんなことを言われたことがある。四、五十代以下の人たちは皆そんな思いをしているのだろう。生産現場でのカイゼンで経済性と合理性を追求するあまり、それが人間社会に及び、そこからはみ出す感情や個々の思いは邪魔でしかないのだろうか。はみ出すのは思いだけでなく、人間もまっすぐ決められたベルトからはみ出す者は居場所を見つけれない。コンビニの明るい笑顔とかけ声で一瞬読みやすい小説に思えるのだがよく読むととても重苦しく感じてしまった。

喜怒哀楽を自分から表すことをしない、出来ない、表し方が解らない恵子。マニュアルがあれば、指示されれば何でも出来る。彼女は自分から喜怒哀楽を表す方法はわからないが他人を冷静に見て表現することは旨い。だがそれは心に思うだけで他人には話さない。コンビニのマニュアル化された明るい笑顔は、心から思わず出る笑顔、笑い声とは違う。コンビニの為の存在、演技。だが事務所での笑いや、からかいの気持ちは本心からである。変わった人の話で盛り上がるのである。コンビニ人間として 24 時間生きている恵子自身が合理的経済的に作られたロボットのようなのである。そこには不満も悲しみもなく、ただ淡々と指示された事をこなしているだけなのである。くたびれたスーツ姿の男性も、はみ出してはいけない上下関係の中に生きて、不満を発散する場所を見つけれず疲れ切っていたのだろう。白羽は経

済的に困窮し他とも折り合えず、その行き着く先には、「生きるためにタガメ男として誰かに寄生し続ける」という事を思いつく。恵子はその合理性と経済性を共有する相手として適任だったのだが、コンビニ人間として再出発した恵子にあっさりと捨てられてしまう。登場人物全てが悪くはない良いと思われる人なのだが、本当にそうだろうか。普通とはなにか、変わっているとは何だろうか。

機械は「あそび」があるから安心して操作できるのだが、人間社会にも無駄とされているものがなければギスギスした社会になってしまうのではないだろうか。機械ではない、人はそれぞれ違って良いと思うし普通、普通ではないとの基準があるならそれは時代と場所によって違うと思う。知らぬ間に「合理的」「経済的」が浸透し、全ての人がいわゆる普通と言われる同じ方向に向かっていくような怖さと気持ち悪さを覚えてしまう。

◆ 【 K子 】

2016年の芥川賞作品です。コンビニを題材とした「面白い」という言葉で片付けられる人も多い様です。奥深く行くと出口に困る小説です。この作品が芥川賞になった事によって選考委員を辞めた高樹のボコさん、島田雅彦さんは「言葉のオーラも心理描写も無し」と... 全く構成も作りも、その抵抗もなく読み終えられます。コンビニ(アルバイト)で18年間働き続けた主人公の金野。ものの考え方が現代人に共感できる部分が多かったのである。芥川賞受賞作の中で又吉直樹(火花)に次ぐ単行本としては熨祭的売行きを1作そうです。コンビニエンスストアという四角箱の中でマニュアル通りにあれば生きていける。又それし、去る主人公(女性)。箱の中から出たいと思ふ事は? 無機質の様でありその中に織り込まれた事を捜すのも「面白い」の中に含まれていさのどは面白いという事?

◆ 【 MM 】

芥川賞を受賞して話題になったことは知っていた。何人かに勧められた。しかし手に取ることはあっても読んだことはなかった。読まず嫌いの一冊だった。

そういう作品を入口にして他の作品も読むようになるのはよくあること。この作品は、「とても好き！」というわけではなく、展開が気になってページをめくるうちにあっという間に物語が終わったという感じだった。この心がぞわぞわする感覚、なんだろう…どうしてなのか知りたいと思った。しかも私が好きな「希望が持てる終わり方」でもない…。でも嫌いではない。他の作品を読んで作者のことを知りたいと思った。

『コンビニ人間』を読んで思ったのは「普通」って何だ？普通がいいのか？普通からはみ出すとどうなるのか？

普通に生きられない娘や姉を持つ身内は大変なのか？普通に結婚し子供をもつことがそんなにいいことなのか？恋愛や結婚をしないという選択をあえてしているのを認められないのか？コンビニでアルバイトをしながら生活している姉に協力しているように見えていた妹も実は姉を受け入れてなかった。「いつになったら治るの？」って…病気じゃないんだよ。「普通がいいという割には幸せそうじゃない人だって珍しくないじゃない！」と読みながら腹が立った。イライラしたのは主人公にもだ。自分で考えない。ルールに従うのは得意そうだが自分がないように見えた。自分の中にもものさしがあれば人が思う普通に自分を押し込めなくていいのに。自分の気持ちもないのかな、これ以上人に入ってこられたら不快とか…だからわけのわからない不満ばかり言って境遇を人のせいばかりにする男に寄生されるのだ…。最後のあたり、コンビニの中でなら生き生きとしていられることにほっとした。そこからは出られないだろうが、息が詰まることもない。ハッピーエンドではない終わり方、でも嘘っぽくない終わり方でそれもよかった。

作者の紹介プリントの中に「10歳の時に執筆を開始し、執筆しているときだけ自分自身を表現し開放することができるようになったと感じていた」とあった。保守的な家庭に育ったとも書かれていて、読書や執筆が彼女の中にあって本当に良かったと思った。作者の母親の願いには沿わなかったかもしれないが、現在の作者の活躍を喜んでいて欲しいなあと思う。子どもが幸せであることが親の幸せであってほしい。